

## 森有礼とトマス・レーク・ハリス

——相互誤解の一例として——

アイヴァン・ホール

今日の話は、ある日本人の教育者にして外交官——すなわち森有礼——と、あるアメリカ人の詩人にして神秘主義者——すなわちトマス・レーク・ハリス——の間の知的関係についてでございますが、この関係を皮肉って言えば、相互理解よりも相互誤解の典型的な例になるかもしれません。

なぜなら、この二人とも、自分の文化における欠点を埋めるために、相手の思想に何か特定なものを求めていたが、相手の文化についての理解が余り断片的なものだったために、知的な擦れ違いが非常に目立ってくるわけです。これは、文化交流の早い時期においては、ごく普通の現象に過ぎません。その典型としては、ボルテール (Voltaire) 等フランスの十八世紀のヒロソフ (Philosophes) がフランスのアンシャン・レジーム (Ancien Régime) の弊害を非難するために、中国を人道的な、合理的な文明大国と

して理想化したことが一番よく挙げられるでしょう。今日の話においても、ハリスは彼の考えた「腐りかかった西洋文明」と「墮落したキリスト教」を改新するために、アジア、特に日本のことを理想化しました。森もまた同様に、彼の期待していた「新しい日本の再生」のために、ハリスのキリスト教から彼自身の侍精神に合う特定なものだけしか取れませんでした。

周知のごとく、森有礼は、明六社と『明六雑誌』の創立者として、また伊藤博文の第一内閣で日本の最初の文部大臣として、また駐米と駐英の日本大使として、明治日本と西洋との外交や文化交流におきまして、大変おきな役割を務めた人物です。森は中年になった頃、もうひとりの西洋人と非常に親しくなっており、この人にも非常に影響されました。この二番目の恩人にあたる西洋人は、イギリスの哲学者のハーバート・スペンサー (Herbert Spencer)

であつて、スペンサーは森の形式的な思想を一番形作った人物だつたと私は判断しております。森は政治的に伊藤博文に非常に近かつたので、ドイツの思想に影響されたとよく誤解されていると思いますが、思想体系から言えば、森は圧倒的に英米派のもので、特にJ・S・ミルとスペンサー流の功利主義者だつたと言えると、思います。ミルの影響ははつきりと森の女性人権論に出ていて、またスペンサーの影響というのは、まことに幅が広く、身体的能力についてははじめとして、森の非宗教的な社会倫理観から、保守的な憲法思想まで及んでいます。実際は、スペンサーは明治憲法の準備に際しまして、自分の自由主義と正反対に、森にたいへん国家主義的な、いや、反動的なアドバイスをやつた歴史もあります。森とスペンサーとの関係も、知的な「誤解」のもう一つの例として挙げられるかもしれませんが、時間の関係もありますので、今日の話をハリスに絞つて、森が接触したもう一つの西洋の大きな思想体系——すなわち英米派のプロテスタント派キリスト教——との関係を紹介させていただきたいと思ひます。まず、森とハリスとの最初の出会いに溯つてみたいと思ひます。

森が一八六五—六六年に、薩摩の留学生としてロンドン大学で勉強している間に、彼はあるイギリス人の紳士——ローレンス・オリファントという人——と非常に親しくなりました。オリファントはイギリスの国会議員であつて、一八六〇年に外交官として江戸の駐日イギリス公使館に勤めた関係でたいへんな親日家であ

ります。オリファントも、ちょうど森が渡英した頃、アメリカの宗教家ハリスの熱心な弟子になつたわけです。一八六七年に、オリファントは、森ら五人の薩摩留学生を一緒に連れて、大西洋を渡つて、ニューヨーク州北部にあつたハリスの宗教団体に入りました。ハリスはこの集団を“Brotherhood of the New Life”すなわち「新生団」と名前をつけていたが、森は丸一年間この新生団の葡萄園でつらい肉體労働をしたり、毎日（ハリスの説教に中心をおいた）礼拝に出たり、規定と規律の厳しい団体生活を体験したりしてから、明治維新が起つてすぐ一八六八年日本に帰りました。三年がたつて、一八七一年に森がまた、駐米全權公使としてアメリカに戻つた時に、彼は新井奥邃という仙台出身の若い友人をハリスの新生団まで連れていつて、入会させたこともありましたが、これは森とハリスとの付き合いについて、歴史に残る最後の出会いだつたようです。森がハリスと個人的な縁を切つた理由は想像する以外はありませんが、それはひょつとしたら森はアメリカ人ともっと広く交際した結果、だいたいアメリカ人がハリスをあまり高く評価していないことをわかつてきたためではないでしょうか。それにしても、ハリスは、一生の間森に対してあたたかい思ひを持っていました。

さて、このハリスは、どんな人間であつて、どんな教義を説いて、日本や森のことになぜ興味を持っていたのでしょうか。トマス・レーク・ハリス (Thomas Lake Harris 1823—1906) は、アメ

リカ十九世紀中期の大衆信教復興運動の最もユニークな、風変わりな人物でもあったかもしれません。ハリスは、若い時に、ある降神術師の影響を受けて心霊論者になって、後にスエデンボルグ教派の信者になりましたが、ハリスは、①降神術の傾向と、②性的な神秘主義 (sexual mysticism) が過ぎたためにスエデンボルグ教会から叩き出されて、ついに組織されたキリスト教全体と縁を切るに至りました。ハリスは工業社会の弊害と西洋文明の退廃を非難して、模範的な生活団体を作ろうとしました。彼は雄弁な説教師で、風采や人格の印象的な人物であったので、森らがハリスに引かれたのは、知的な面よりも人格的な面であったとは言えましよう。

西洋文明やキリスト教の再生のために自分の事を「枢軸の人」(pivotal man) と称して、性道德と女性神崇拜を中心にしたハリスの「真のキリスト教」を普及させるために、まず、天照大神を崇拜している日本と日本人から始めればいいと思ひ込んでいたらしいのです。ハリスによると、キリスト教、ユダヤ教、回教等西洋の宗教は、皆、一神論への執着のために余りにも男性的で、ドライで、残酷なものでした。彼は、西洋優越主義と正反対に一種のアジア主義を唱えて、西洋人よりもアジア人のほうが知的に敏感で精神的に従順でおとなしく、信心深く直覚的な能力に富んでいるので、アジア人こそが「真のキリスト教」に向いていると判断していました。

私に言わせると、ハリスのこういう発言には驚くほど鋭い洞察力がみられます。ハリスはアジアについてほとんど知識を持っていないアメリカ人でした。

しかし、それにしても、ハリスはここで、たいへん粗末ながらひとつの、いわば東洋人の思维方法論を試みていて、すくなくとも直覚的な能力で、アジア人の思考パターンや感情構造や性格を理解しようとする努力していると思います。この発言についても一つ大事なところですが、それは、百年間のアメリカ人のアジア観で大きな役割を果たしている日本や日本文化についての女性的なイメージが、このハリスの発言に、はつきりと、また非常に早い時期に出てきたということです。この女性的なイメージは、明治時代に特に強かったし、その原因(あるいは構成部分)としては、日本の美術にあらわれる日本人の美意識と仏教の柔和さ、それにもちろん日本の伝統的な女性の女性らしさもあげられるでしょう。こういったイメージは、たいへん好意的で友好的なものでしたが、大きな欠点としては、日本を近代国家としてあまり真剣に考えていなかったことがあげられます。日露戦争をきっかけに、アメリカ人の頭の中にあつた日本についての女性的なイメージは、男性的なイメージに移りました。侍文化・武士道・日本刀等に基づくこのイメージに、さらに日本の新しい工業能力や軍事能力を加えると、この男性的なイメージは脅威的で、怖いものにまで発展してしまいました。このイメージはもちろんだ第二次世界大戦の

頃いちばん強かったわけです。しかし、また戦後になって、最初の十年や十五年のうちに、大勢のアメリカ人の作家や知識人はもう一度あの女性的なイメージを掘り出して、現代日本をお寺や茶の湯やゆったりした生活様式を持った田園の天国と理想化して、それをもってアメリカの物質文明を非難した歴史もあります。今になって、日本がまた経済大国に発展したため、あのややこわい男性的なイメージはまた戻りつつあると思いますが、重要なのは、いずれのイメージも非常に不完全なものだった、ということですが、実際に、ハリスの日本の宗教や政治についての知識がどれほど表面的なものであったかは、ハリスの伝記を書いたスコットランド人のアーサー・カースバート (Arthur Cuthbert) の文書でいちばんよくわかると思います。要するに、世界各国の貴族階級のほとんどが真の宗教の進展を妨げていますが、女神を崇拜している日本の武士階級だけが大きな例外だとハリスは思っていました。

実際に、ハリスが「日本の予言」(A Prophecy of Japan) という覚え書き(一八六七年七月)に書いているように、彼は森らの留学生を日本に帰国させ、彼らを中心に若い武士を動員して、薩摩の大名をハリス教に改宗させて、全日本で宗教革命を起こす、という文字通りのクーデターを計画していたわけです。

ハリスがここで夢中になったことには、十分な理由があったと言わなければなりません。なぜなら、ちょうどその時点で森ら薩摩の留学生五人が彼の新生団に入会することになったためです。

ハリスの米国の思想史における位置づけはたいへん難しく、宗教学者も彼の評価にたいへん迷っているようです。今日になって、ハリスはごく少数の専門家以外には完全に忘れられた人物になっていきますし、私が先に引用したハリスの文書は全部コロンビア大学図書館所蔵の未刊の原稿からのものです。確かなのは、ハリスと彼の新生団は、後年になって道德的にも、また知的にも、衰頹した、ということですが、もちろんその新生団の葡萄園はたいへんよく儲かりましたし、マックス・ウェーバー (Max Weber) は、この新生団を、アメリカ宗教における周辺の教派でよくみられる経済的な合理性と、宗教的な奇行 (eccentricity) の見事な組合せの典型として褒めたこともありまう。しかし、後年になりますと、ハリスとその女性の信者との間にセックス・スキャンダルが起こったという噂がアメリカの新聞に出たこともあって、ハリスの教えと彼の文章はますます濁ってきてわかりにくくなります。十九世紀末期の一般傾向として、世紀の中期アメリカで流行っていたユートピア的な社会主義の思想は、二つの流れに分裂して、その積極的な方は労働運動やアナキズムに走り、その消極的な方はえせ科学的な神秘主義や神知学 (すなわち "Theosophy") など、インドの哲学を取り入れる方向へ逃げました。ハリスは後の方向を選びました。

さて、森という薩摩の若い侍は、なぜ日本について少し変わった興味を持ったアメリカ人の教えに、興味を持っていたのでしょうか

か。確かに森はハリスのスエデンボルグ流の複雑な教義を飲み込めなかったのでしょう。また、森はもっと正統派的なキリスト教の教義にも余り関心や理解を示していませんでした。森に大きな影響を与えたのは、もっと簡単に、キリスト教一般の個人レベルでの道徳観と社会レベルでの倫理観だったと思います。そこで、十九世紀中期のアメリカにピューリタンのな部分(特に禁欲主義の部分)がいまだに強く働いていて、こういう教えはハリスの毎日の説教にも、またハリスの信者の大多数を占めたごく普通のプロテスタント信者たちの日常生活にも、はつきりと出ていました。私のこういう解釈は、森の晩年の生活にも裏づけられていると思います。森は後になって、よく聖書を読みながら、たいへんピューリタンのな生涯を送ったわけですが、彼は教会にも行かないで、どの教会にも入会しませんでした。また、彼は日本におけるキリスト教の普及には努めていませんでした。森の敵は彼の思想を誤解して、森が西洋の文明に熱心なので、キリスト教の支持者でもあるという単純な結論に走ってしまったわけです。しかし森は、文部大臣としても、あくまで非宗教的な教育主義の原則を守って、キリスト教を含めて、どの宗教でも日本の教育制度から外そうとしていた人物です。

それにもかかわらず、森はハリスに二つの特定なものを求めていたと思います。森が薩摩の青年とロンドンでの留学生として残した文書を読みますと、森は二つの問題に悩んでいて、その解釈

のために相応しい教えを見つけるに必死であったことがよくわかります。その一つの問題は性道徳のことで、そのもう一つの問題は、日本国民を近代国家の市民に再生させるための新しい社会倫理観でした。後年になって、森は知的なレベルにおいて、スペンサーの功利主義的な倫理観を完全に受け取っていたらしいのです。文部省が一八八八年に発行した『倫理書』の中で、森は彼自己流の概念、すなわち「*自他並立*」を説明して、それも英語で「*The Cooperation of Self and Other*」と訳しています。これは直接にスペンサーの概念を借りたもので、すなわちスペンサーが倫理の基本にした「*Egoism and Altruism*」(利己主義と利他主義)とのバランスを取り入れたものでした。

スペンサーの知的な影響がこんなに強かったにもかかわらず、ハリスの影響は森の個人的な道徳観や、近代日本のための道徳的な未来像にはつきりと現われてくると思います。ハリスの教えの中心にあったピューリタンのな性欲の節制主義は森にとっては大変有意義なものでしたし、また若き侍の森にとっては、あの新生団におけるつらい肉体労働と規律の厳しい団体生活と忠実と服従の教えは、全部たいへん親しみやすいものだったことは、よく想像できると思います。ハリスの影響は、おそらく森の身体教育への熱意、兵式体操政策や各師範学校における厳しい生活様式、また森が日本国民に期待していた献身的な教育者や従順な生徒たちや勤勉な市民たちの理想像までも、その尾を引いていたのでは

ないでしょうか。ハリスはまた、偶然にも森の國家主義やナショナリズムにも貢献したかもしれません——ハリスが、日本の西洋に対しての防衛の必要性を説いたために——

大事なのは、森が自分の関心に近いものだけを取っていて、またハリスのことを深く吸い込むことができたのも、ハリスの精神が待精神に近かったためだった、ということだと思います。森のこういう傾向は、明治初期のもっと一般的な傾向にも当てはめられると思います。当時の若い日本人がどれほどアメリカのプロテスタントの倫理観——特にその儒教に近い部分——に共鳴していたのか、東大の亀井俊介教授も『メリケンからアメリカへ』という本で大変面白く説明しています。

参考文献

Van Hall, *Mori Arinori*, Harvard u.p. 1973.

(Van Hall, 日本史, 日米友好基金事務総長代理)